

闇を溶かした波は静かに寄せては返しながら砂浜を侵食していた。今腰を下ろしていることも、手に触れる砂も、そのうち水に漬かり黒く染まる。

菊は座ったまま月を見上げた。細り始めた月の輪郭は闇に滲んでいた。松林を風が揺らしざわめきのような音を菊の耳に届けた。音のあるその時間を、菊は「静かだ」と思った。世界は風いである。そして、またはそれなのに、この国は戦争をしている。

「——先生、」

掌についた砂を落としながら、菊は囁くように言った。横たわる隣から、返事は無い。最前より目を閉じているようだったから、寝ているのかもしれない。それでもいい……いや、それならいい、と菊は思った。更に声を潜め、そつと、そつと呟いた。

「私——」

突然がばりと起き上がる気配がして、菊は驚いて隣を振り返った。目を大きく見開いたギルベルトが菊を見ていた。いつも着ている端正なシャツと銀の髪が月光を白く跳ね返す。

「せ、んせい……起きていらしたんですか」

取り繕う方が分からずそう聞くと、菊を呆然とみていたギルベルトは、ぐるりと見渡してしばらく波の音を聞いた後、

ぺちんと額を叩くように顔に手を当てた。腕に付いていたらしい砂がばらばらと落ちた。

「——ああ、夢か」

「……」

返答に窮して、菊は黙った。そうです、夢ですというのもおかしい。夢だと思つて忘れて下さい、などと夢から覚めた後に言われるのも不自然だ。口を小さく開けたり閉じたりしていると、「なんだ、可愛いな」とギルベルトは笑つて頭をぼんと叩いてきた。

「え」

「いい夢見た。じゃな」

軽く手を上げて、ギルベルトはまた上体を倒した。え、と言う間もなく、目を閉じている。

「せ、先生」

混乱のせいで、菊は思わずギルベルトを揺さぶった。その力が強かったのか、「んあ！」と階段を踏み外したような声を上げて、ギルベルトが目を開ける。そして頭を掻きながらまた起き上がった。

「折角『起きられそう』だったのによ……」

「す、すみません」

意味が分からないながら頭を下げる菊に、ギルベルトがひらひらと手を振る。

「いや、こっちの都合。お前が謝ることねえ」

「はあ……すみません」

「謝らなつて」

手の甲で軽く額を叩かれる。

はあ、と返しながらも、菊の混乱は続いたままだ。ギルベルトとは、教室で顔を合わせる以外にはこうして二、三度浜辺で行き会つてぼつぼつと会話したことがある程度だが、こんな気安い態度を向けられたことはない。自分に対して以外でもこんな雑駁な言葉遣いをしてみせたことは無かつたように思う。素はこうなのだと言われれば納得はできるが、突然こんな言動を始めた理由はやっぱり分からない。

「あの」

「ん？」

「ど、どうかなさつたんですか」

「あー、うん」

ギルベルトはまたがりがり頭を掻いた。やがてその手を膝の上に投げやつて、苦笑するように言った。

「夢を見ているんだ」

「……」

そんな映画俳優のような顔で言う台詞ではない。なるほど、まだ寝ぼけているのかと独り合点した菊を余所に、ギルベルトは辺りを見渡した。

「瀬戸内……じゃねえよな、このだだっ広いのは明らかに太平洋だもんな」

視線の先には稲毛浅間神社の海中鳥居がある。厳島のような立派なものでは、もちろんない。しかしその疑念が出てくること自体が謎だ。いくら在日年数が短いといつても……いや、短いからこそ勤務地以外に見覚えはないだろう。

知らず眉間を寄せていると、ギルベルトが振り返つた。

「なあ、ここ、どこだ？」

「どこつて、浜海岸ですけど」

呼び慣れている言い方が口を突いて出たが、瀬戸内海かどうかという文脈で返す言葉ではない。菊は言葉を換えた。

「稲毛海岸です」

「いなげ？」

「千葉市の……先生、どうかなさつたんですか」

ああ、千葉の、稲毛。分かる。菊の質問は受け流してそう言つた後に、「先生……」と呟く。そして、菊を指し、「生徒？」と聞く。頷くと、ギルベルトは更に聞いた。

「どこの？」

眉間の皺は消えるどころかますます深くなつてしまふ。これだけはつきり受け答えをしていて「寝ぼけ」でもあるまい。

「東大のです、もちろん。」

「え。もちろんつて……え、千葉で、東大？ 柏……じゃねえよな？ あれ米軍施設跡地だった筈だし、つくばエクस्प्रेस沿いつて海ねえよな」

「米軍……施設……？」